



Title	サロベツ原野南部における沖積層の地質構造と地下水流動,およびその完新世における成立過程 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	酒井, 利彰
Citation	北海道大学. 博士(工学) 甲第11904号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/58784">http://hdl.handle.net/2115/58784</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Toshiaki_Sakai_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

博士の専攻分野の名称 博士(工学) 氏名 酒井 利彰

### 学 位 論 文 題 名

サロベツ原野南部における沖積層の地質構造と地下水流動, およびその完新世における成立過程  
(Geological structure and groundwater flow of alluvium at the south Sarobetsu moor, and its history  
in Holocene)

サロベツ原野は北海道北部の日本海沿岸に位置する沖積平野である。三方を山地に囲まれており、山地を涵養域とする地下水の流出域にあたる。サロベツ原野の地質構造や地下水流動は、沿岸域地下における物質移動を把握するための基礎情報であり、地下利用に関わる分野に大きく貢献する。また、沖積層内の地質構造やそれに規制された地下水流動は湿原の環境に大きく影響する可能性があり、湿原の保全や地域の水資源評価の観点からも研究が必要とされている。

本研究は、サロベツ原野南部における沖積層の地質構造および堆積環境を明らかにしたうえで、沖積層内の水文地質構造モデルを構築してサロベツ原野南部の地下水流動系を評価するとともに、その成因や形成時期を検討して、超長期的かつ継続的な地下利用および環境保全の基礎資料とすることを目的とする。本論文は5章で構成されている。

第1章では、本論文の序章として、研究の背景と目的、既往研究の概要、調査地域の地形地質概要について述べた。

第2章では、サロベツ原野南部で掘削された5本のボーリングコアを用いて地質観察、C-14年代分析、C/S分析を行い、既存の調査結果を踏まえて沖積層の地質構造と堆積環境を復元し、完新世の地殻変動の検討を行った。その結果、サロベツ原野の沖積基底面は海側の深い面と内陸側の浅い面とに分かれ、両者の間は段丘状の不連続な地形をなす。沖積層は10.5kyr BPの海退面と6.2~8kyr BPの海成堆積物の上下面を境に、下位よりP11, Ho1, Ho2, Ho3の4部層に区分された。さらに完新世の環境変遷を復元した結果、12~14.5kyr BPは網状河川主体、約12kyr BPからは湖沼主体であった。10.5kyr BPには海退が起き不連続面が形成され、それ以降は8kyr BP頃まで氾濫原環境が主体となった。7.5~8kyr BPには広範囲がバリア-ラグーンおよび干潟の環境となった。7.4kyr BP以降に淡水環境へ変化し、6.2kyr BP前後に再び海水環境へと変化した。6.2kyr BP以降は砂丘、氾濫原、泥炭などの淡水環境となった。続いて海水準付近で形成された堆積物の標高変化から完新世の地殻変動を推定した。6.2kyr BP以降、サロベツ原野域が丘陵部に対し沈降する相対変位があった。6~10kyr BPにはサロベツ原野中央~沿岸部が原野東部に対し沈降する相対変位があった。

第3章では、地下水観測井や既存井戸を利用した現地調査と水質分析によりサロベツ原野南部の沖積層内の水文地質構造と地下水流動を明らかにし、さらにMODFLOWを用いた地下水流動解析による検証・解析を行った。サロベツ原野南部の沖積層の透水係数は、泥質部が $10^{-6} \sim 10^{-7}$  m/s、砂質部が $10^{-3} \sim 10^{-5}$  m/sを示した。Ho2の下部に位置する最大海進期の粘土質堆積物(Ho-1a層)は透水係数が $10^{-7} \sim 10^{-9}$  m/sを示した。地下水水質は主に循環性の特徴を示したが、基盤岩の一部が停滞性の特徴を示した。酸素・水素同位体比は天水起源の値を示し、深部で軽い値を示す傾向が認められた。トリチウムはHo-1a層より上位のみから検出された。水理水頭の観測値は原野東端部の基盤岩周辺が最も高く、浅部~海側に離れるほど低くなる傾向が認められた。水理水頭の観測値はHo-1a層よ

り上位では季節変動を示したが、下位では変動が認められなかった。水質分析結果と水理水頭の年変動状況を考慮すると、サロベツ原野南部の地下水流動系は Ho-la 層によって上下に分断されており、上位では天水涵養の影響が大きく、下位では原野東端部の高い水理水頭を有する基盤岩からの影響が大きいと考えられる。また基盤岩から供給される地下水は、内陸側の山地での天水が起源と考えられる。Ho-la 層より上位は水理水頭が地下水面とほぼ等しいため、浅層地下水は地下水面の勾配に従い流動すると考えられる。地下水流動解析の結果もこれらの解釈を支持した。原野東端部の特異的に高い水理水頭に関しては、2次元断面モデル中で高水頭部の分布範囲を変化させて複数回の計算を行い、水理水頭実測値の再現性が高いケースを抽出した。その結果、高水頭部の分布範囲は原野東端部の褶曲構造部のみに限られると推定され、第2章で推定した完新世の地殻変動との関連が疑われた。

第4章では、過去の地形・地質・水文環境の変遷と地下水流動解析とを組合せ、完新世の地下水流動を復元し、高水頭部の成因や形成時期を検討した。第2章の解析結果をもとに、完新世(7.5kyr BP, 9kyr BP, 10kyr BP)の地形地質を復元し、次に復元した完新世の地形地質と堆積環境をもとに、当時の水理地質構造と地下水流動を推定した。続いて復元した地形地質をもとに2次元断面モデルを作成し、高水頭部なしの場合とありの場合のモデル計算を行った。その結果、7.5kyr BP以降は高水頭部あり、9kyr BP以前は高水頭部なしの解析条件のときが、モデル解析結果と推定地下水流動が整合したため、高水頭部は7.5~9kyr BPの間に形成されたと推定された。形成年代と分布位置の両方が合致することから、第2章で推定した完新世の地殻変動が高水頭部の形成に関連していることが示唆された。このとき、上下方向の地下水流動を遮断する Ho-la 層がキャップの役割を果たし、高水頭部が現在まで保存されたと推定される。

第5章ではサロベツ原野南部の沖積層内の水文地質構造と地下水流動、完新世の地下水流動の復元と高水頭部の成因や形成時期についてまとめた。